

# 美奈宜神社と蜷城の地名の始まり

## 〔国宝〕『宗像大社文書第三卷』より抜粋

(原文)

『二世紀初頭、神功皇后のお話より』

天皇隠給事、皇后悲歎、新羅國討  
 取、穀慮、廻給、志賀嶋明神其時昔  
 磯良丸姓、安曇、海平栖時、陸地  
 出采計、武内大臣言磯良丸、水陸自在之員  
 人也、被召彼、可被依合、奏、因茲武内下、勅宣  
 雖被召磯良、始、逃隱、更不相從、勅余其時  
 武内、埋内外之方便、欲、傷其心、磯良又日本愛  
 物、増典者也、然、則、以、歌、舞、之、能、可、在、寄、志、賀  
 嶋、磯良、濱、肯、天、岩、戸、曲、被、始、行、神、樂、於  
 訝、有、拍、子、八、人、女、等、觀、歎、盡、曲、時、磯良、童、敢、  
 示、龜、甲、來、臨、其、形、甚、醜、陋、也、身、敢、取、思、故、  
 不、近、付、其、時、神、樂、人、等、計、知、其、心、隱、而、奔、避、之、  
 時、磯良、同、感、歎、隱、而、六、奔、出、時、武内、安、語、  
 侍、皇后、勅、先、不、討、熊、襲、者、河、煩、多、可、有、以、  
 何、勅、武内、計、安、可、已、術、以、磯良、計、  
 石、可、拾、貞、進、可、被、下、勅、也、于、時、磯良、家、勅、宣、  
 海童神河童神等、語、集、十、万、石、之、蜷、一、夜、  
 之中、拾、上、乎、其、時、以、蜷、高、十、丈、之、城、築、其、中、  
 奉、入、皇、后、以、和、議、詞、招、寄、熊、襲、曰、皇、后、此、内、  
 御、坐、速、下、來、給、由、告、申、熊、襲、成、書、城、中、入、乎、  
 其、時、皇、后、城、中、逃、出、給、復、蜷、城、願、度、熊、襲、  
 討、致、早、筑、前、州、蜷、城、中、所、是、也、

(現代語訳)

天皇が崩御されたことで、新羅国を討伐しようと叡慮を廻らされた。志賀島明神の磯良丸（いそらまる）、姓は安曇（あずみ）と申す者、海の中をすみかとし、時々陸に出て来ていた。武内の大臣（おおおみ）が言うには、磯良丸は、水陸自在の秀でた者である、彼を召し出されて協力すべく仰せらるればよろしかろうと。（こう）奏上し、武内は勅宣を下して、磯良を召し出そうとしたが、はじめは逃げ隠れして、一向に勅命に従わなかった。その時、武内は内外の知恵工夫を廻らして、その心の蕩（とろ）かしてしまおうと企てた。磯良は、もとより宴席を好み、（それによって）興に乗ずる者である。そうであるならば、歌や舞を以て呼び寄せるとよいとして、志賀島の磯良の浜にて、昔天の岩戸の音曲を行い始められた。神樂を歌い、拍子を打ち、八人の娘らが袂（たもと）を翻して、音曲を尽くした。その時、磯良は童形（どうぎょう）・背が低くて子供のような出で立ち）で、亀の甲羅に乗って入ってきたが、姿形ははなはだ醜く卑しいものであった。その姿を恥ずかしく思うために近づこうとはしなかった。その時、神樂を舞う人達は、その心を計り知って（皆面を着けて）顔を隠した。舞踊の折、磯良は同調感心して面を隠し、共に舞い出て来た。この時武内はいとも簡単に話しかけることができた。皇后は、「先ず熊襲を討たなければ、心配ごとが多きこととなるでしょう」と仰せになった。武内は計つてた安く亡ぼす方策があり、磯良が計画して、蜷（「にな」でなく「みな」とふりがなあり）十万石を拾い貢進すべき、勅を下さるべきであると言った。この時、磯良は勅宣を受けて、海童神・河童神らを誘い集めて、十万石の蜷（みな）を一夜の内に拾い上げてしまった。その蜷を以て高さ十丈の城を築いて、その中に皇后に入っていただき、和議の詞（ことば）を以て熊襲を招き寄せて、皇后はこの中におられるので速やかに来臨すべき由を告げたところ、熊襲は喜んで城内に入ってしまった。その際、皇后が城中を逃げ出された後、蜷城（ひなしろ）を崩してしまい、熊襲を討ち取ってしまった。筑前の州（くに）に蜷城（みなぎ）とふりがなあり」と申す所がこれである。

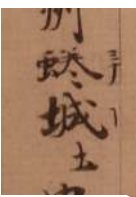
平成二十七年七月十九日

現代語訳責任

武田 忠信

追補

- 漢字は、新字体に統一
- （ ）書きは、訳意を明らかにするため、意味、補充等を訳者が補ったもの。
- 一丈は、十尺。十丈は、百尺。一尺が約0.3メートル、よつて蜷城の高さは、約三〇メートルと推察される。



※当時、蜷城のふりがなはミナギと記されています  
 (この書物は西暦一三〇〇年頃製作)